

2023年3月5日大齋節第二主日

創世記 12 章 1-8 節

ローマの信徒への手紙 4 章 1-5、13-17 節

ヨハネによる福音書 3 章 1-17 節

3月3日付で主教様より「新型コロナウイルス感染症対応ガイドライン」がでました。マスク着用と「新型コロナ」が「5類」に移行した際の注意点について記してあります。いよいよコロナ禍終息を前提とした歩みが始まります。その喜びと春の温かさを感じつつも、今年の花粉は非常に多いようです。皆さまもどうぞお気を付けてください。

本日の旧約日課は、創世記 12 章 1 - 8 節です。創世記 1 章から 11 章の原初史がおわり、いよいよ本格的に『聖書（旧約）』の物語が始まる箇所です。ここは「わたしはあなたを大いなる国民にし、あなたを祝福し、あなたの名を高める、祝福の源となるように」（創 12：2）とある通り、主なる神様が、アブラハム（まだアブラムですが）へ呼びかけるところから始まります。その呼びかけは、のちにアブラハムが「諸国民の父」（創 17：6 など）と呼ばれるようになる、すなわち、ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教の信仰者の父であるといわれるようになることの始まりでもあります。

さて、本日の福音書は、イエス様とファリサイ派の教師ニコデモとの物語です。「ヨハネによる福音書」という物語世界の中でこのファリサイ派の人たちは、イエス様が、主なる神様から来た教師と考えるか否かで論争していたようです。ニコデモは、イエスさまを主なる神様から来た方と考えるようです。それは「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです」（ヨハネ 3：2）という言葉に現れています。ニコデモは、イエス様の行うしるしの存在に気づいていたのです。

イエスさまは、最初のニコデモの問いかけに対して、「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と答えます。この唐突な答えは、会話が成立しているとは言えません。にもかかわらず、ニコデモは、「新たに生まれること」を主題にして、会話を平然と進めます。「生まれること」について、肉体的意味と霊的意味とのずれが生じたまま会話が進むのです。この会話のずれや同じ言葉の認識のずれが、「ヨハネによる福音書」の特徴の一つです。なぜならば、信仰的な気づきという事柄は、この認識のずれから誕生するからです。わたしたちはこの世界に生きていますが、この世界の認識だけにとどまり続けていては、イエス様の示す救いを経験できません。しかし、イエス様による救いは、この世界から全く隔絶した事柄ではありません。そうでなければ、天地創造の初めから主なる神様とおられるイエス様が肉体をとって人となられる必要もないからです。この世界に生きていながら、イエス様を通して何を見出して信じるかが大切なのです。本日の物語の中でのニコデモは、見出せませんでした。

ニコデモとの会話の不成立の背景には、「新しく」という言葉の意味の違いもあります。「新しく」という言葉には、「もう一度」と「上から」という意味があ

るからです。ニコデモは文字通りに肉体的に「もう一度生まれる」とイエス様に言われたと思い、そんな事は出来ないと答えたのです。その理解は間違っていない。しかし、イエス様は「上から」、すなわち主なる神様によってという霊的な意味で語ったのです。

「新しく」という言葉の意味の誤解が解けないまま、次にイエス様は、「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。」(ヨハネ 3:5) と語ります。そして、「(神の) 霊」についての事柄を問題とします。このイエス様の言葉にも二つの意味があります。もしイエス様を信じているがゆえに、「水と霊」で洗礼を連想すれば、それはそれで正解といえます。しかし、「水」を肉体的意味、「霊」はそれが以外の意味と、全く別々な事柄とだけとらえてしまうと理解不能になります。ニコデモはそのようにとったのでしょう。特にイエス様は「**風は思いのままに吹く**」(ヨハネ 3:8) と語りますが、「風」と「霊」は同じ言葉ですから、「風」の方に認識すれば、もう完全に理解不能です(新しい聖書協会共同訳では注に『別訳「霊」』とあります)。「**どうして、そんなことがありえましょうか**」(ヨハネ 3:9) と答えてしまうのです。もちろんここも、主なる神様の「霊」と受け取れば、いつでもその恵み豊かな「霊」が降り注ぐ意味だと分かります。

わたしたちは肉体的な誕生によって今を生きていますが、イエス様を信じることによって、肉体を持ったまま、霊的な存在へと変えられます。信仰によって、そのような転換が起こるのですが、ニコデモは、このことを理解できませんでした。しかし、理解できなかったのは正しい反応でもあります。それは理解することではなく、信じることによって生じる霊の働きであるからです。

「ヨハネによる福音書」において、この霊の働きは、イエス様を通して働くのですが、とくに、イエス様の十字架と復活に集中します。言い換えれば、十字架と復活がイエス様の示す最大の「しるし」です。それは、認識できるか理解できるかの問題ではなく、信じるか信じないかという問題です。ニコデモが超えられなかったのはこの違いでした。それでは、なぜ、そこまで信じることを求めるのでしょうか。それは「**神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。**」(ヨハネ 3:16) からです。

アブラハムは、何の前提も条件もないところから、主なる神様の呼びかけからすべてを始めました。それは、わたしたちの信仰も歩む目的も、すべて主なる神様から与えられるということを示します。わたしたちは、自分で何かを認識し、考え、決断し、目的を決めて歩むのですが、イエス様を信じて歩むとき、それらすべてが、主なる神様の恵みと守りのもとにあることを理解します。だから、信仰者には救いがあるのです。

今年の大斎節も、コロナ禍の中にありました。しかし、それは「禍」であったと同時に今までにない気づきと恵みがあった時でもありました。イエス様を信じるわたしたちのために、主なる神様は教会を通して様々な恵みを下さいます。主なる神様がわたしたちにそのような恵みを下さる目的は、わたしたちがこの世界でより良く生きるためです。そのより良く生きるという事柄が、イエス様の十字架と復活による、永遠の命の希望のもとにあることを、深く心に刻みたいと思います。